

追悼録

後藤君の死を悼む

清水 泰

長い間愛用していた櫛の歯が、ある朝ホロリと一本かけた。なんともいえぬうつろな寂しさ。後藤さんの死を聞いた時、ふつと、そんなきびしさが私の胸をかすめた。

後藤君との交遊はふるい学生時代にさかのぼる。氏はいつもカスリの和服だった。一度後藤君にノートを借りた事がある。その札心で有馬の子持筆をやつたのを氏はいつまでも銘記していて、折にふれ、そのことをいつていた。私は平家物語に修繕寺の筆、巴書いたる筆の軸、というようなことがあるのでやつたように覚えていた。

字はその人の性格を現わすというが、後藤君の字は、すこし線の細い、殆んど楷書に近い正確な字を最後まで書いていた。まことにその通り、後藤君は、地味で、あせらず、てらわず、着実に、日々研究に没頭していた。

いわゆる明治時代に生れた学者の中の学者であつた。

ある若い国文学者が、「後藤先生という人はもつとこわい人かと思つていた。」と、初対面の感想をもらしたことがあつたが、あるいはあの何となくにかむような姿態と、少々甲高いやさしさを持つた声とからは、あの理路整然とした論文を書く人物は想像出来なかつたかも知れぬ。

大学卒業後十何年かして後藤君を立命館大学に迎えることが出来てからは、一時跡絶えていた交友はふたたびよみがえり、共に語り、共に論ずる機会が多くなつた。私も時折後藤家を訪れたが、氏も亦、よく来て下さつた。話はいつも研究のこと、学問以外の話はあまりしたことがなかつた。

戦時中のことであつた。その頃私もすこし体を弱らせて田舎の親許へしばらく静養に帰つていたことがあつたが、後藤君も大分こたえたらしく、書物を手放す相談に來たり、また、家に田舎からの食料がとどけられた時など、たらふく食べてもらつた事もあつた。

しかし、酒もたばこも飲まなかつた氏は、胸襟を開いて相語る、ということとはなかつた。

た。とくに自分の家についてはついぞ語らなかつた。

いつの時代でもそういうことは多少いえることではあるが、とりわけ戦後の学者は人間関係も複雑になり、そのうえ、学校の雑務にしばられて、かつての時代のように、一人書齋に籠つてこつこつと研究を重ねてばかりはいられなくなつて來ている。思えば後藤君はよき時代、恵まれた時代に生れて來た尊い本格的な学者の一人というべきであらう。

「明治は遠くなりけり」

後藤君の靈よ、もつて冥すべし。

(本学名譽教授)

後藤丹治氏のこと

国崎 望久太郎

後藤丹治氏が急逝された。実はあまり突然だつたので何か実感が湧かない。そして今も学校の前のあの家に端然と坐つていられるような気がする。しかし段々そうではなく、もうこの世にはいられないことが、後の始末や蔵書の整理という形で、目の前にあらわれてくると、変に寂しい感で迫つて來るのであつた。

た。後藤さんはなくなられたのである。

丁度、日本文学協会の大会を立命で引き
けていて忙しい最中であつた。大会の運営の
準備や何やかやで森本君の責任は大変であつ
た。その中でもかまかく葬儀はどこおりになく
執行され、茶毘にふされた御遺骨の前に坐つ
たときは、ほつとした思ひであつた。現職は
皇学館大学であつたけれども、長い立命館大
学との関係からして、私達としては、それに
参加することは、何の躊躇いもなかつた。氏の
学者としての生涯の大部分は立命館大学と共
にあつた。葬儀にあつて厚い志をもつて何
かと働いたのも立命の卒業生であり、教え子
であつた。立命の日本文学専攻が今日このよ
うになるには、後藤氏の力があつた。その寄与
と功績とは長く記憶しなければならないだろ
う。

中世文学から近世文学へ研究の歩武を進め
られた氏の学問について語ることは、私の任
ではない。沢山の業績が十二分にそれを語つ
ている。おそらく後生を啓発するに足る不滅
のものがある。それは信じてよい。氏ほど醇
乎たる学者的良心をもつて、時には論争も辞
せぬ探求心によつて精進した学者は、そう多

くはない。一筋に学問に生きた方であつた

し、そういう情熱が学生を引きつけたのであ
る。世俗のことに介意せぬことが学者の資格
とは思わぬが、烈しい学問的追及の道途に、
そういうことが雲煙漠々たる彼方にかすむこ
とは当然ありうべきことであつたし、美しい
生き方であつた。後藤さんを思うとそういう
烈しい生き方が身近にあるという安心と憧憬
を感じたものである。私はそういう意味で氏
の死は何よりも無念であり残念であつた。し
かし、それは現身にかかわらぬことであると
すれば、今後も長く私自身の中に生き続ける
後藤丹治像であらうか。

氏についての個人的な回想や挿話もいくつ
かあるけれども、何しろ二十年をこすほどの
久しい期間としては淡々としたものであつ
た。そのことが改めていま想起される次第で
ある。年齢の違いということよりも、もつと
別の事情があつたようだ。それでも終始一貫
して敬意をもちつづけえた先輩であつたこと
は、私の何よりの幸せであつた。静かな後藤
さんの御冥福を祈る次第である。

(本学教授)

思　い　出

浅野達三

私が文学部ではじめての助手として、哲学
の岸田君と共に研究室に勤めさせて戴く様
なつたのは昭和二十三年、文学部長橋本先
生、主任教授清水先生の時でしたが、直接の
指導教授としては後藤先生を仰いでいまし
た。当時の国文学研究室は中川会館の二階に
国史と共同であり、教授会もこの室で開かれ
ていたので会議の間は外をブラブラしていた
ものです。近松の演劇的な考察を指摘してい
た私は、後藤先生から実証的で緻密な研究方
法を教えられ乍らもそれに従わず、すすめら
れた近松用語の索引カードの作製も途中で投
げ出してしまつた様な訳で、不甲斐ない男と
お思ひだつたことと思ひます。

今の経営学部のところに木造の文学部学舎
が建つた時の研究室の移転は大変でした。用
務員氏のリヤカーの後押しをして河原町通の
電車道を何回も往復したことでした。この頃
は後藤先生が研究室の主任でしたが、どこに